

植民地朝鮮における日本人と日本音楽 —新聞・ラジオ放送からみる普及・享受・展開—

金 志善 (日本学術振興会特別研究員RPD・東京大学)

本発表の目的は、植民地朝鮮(1910~1945)における日本人が享受していた音楽の中、最も人気のあった日本音楽の享受実態を『京城日報』(日本語版、1906~1945)や京城放送局(JODK)プログラムなどの当地のメディア情報を手掛かりに明らかにし、日本外地に移住していた日本人の娯楽・慰安の実態を迫ることで約100年前の音楽文化享受実態の様子を描き出すことである。

朝鮮に移住した日本人の中には朝鮮を拠点に活動を行う音楽家(邦楽家も含む)が数多く存在しており、演奏、教育、執筆活動などを行っていた。また、日本本土から訪れる多くの音楽家による公演も多く実現していた。植民地朝鮮には朝鮮在来の音楽に加え、西洋音楽と日本音楽、大衆音楽が混在する状況が生み出されていた。このような状況の中で、在朝鮮日本人が最も好んでいた音楽は、日本音楽であったとされる。これについては、聴取料で運営していたラジオの特質上、聴衆者の趣向を敏感に反応しなければならなかった京城放送局(JODK)の音楽プログラムの比率からも確認できる。『京城日報』や京城放送局(JODK)の音楽プログラムなどのメディア情報を通じて、在朝鮮日本人は最も慰安できる日本音楽の情報を得て、享受できる手段として利用していた。

しかし、植民地朝鮮を含む、日本外地における日本人の音楽享受実態については、いくつかの事例研究があるものの、まだ明らかにされてこなかった。本発表では、朝鮮に移住者・植民者であった「在朝鮮日本人の日本音楽の享受」に焦点を絞り、当地のメディア情報を基に実態究明をすることで、今までの先行研究との差別化を計り、植民地朝鮮の音楽文化状況の一端を明らかにする。また、植民地朝鮮における日本音楽が日韓近代音楽史においてどのような意義を持つのか総合的に考察する。